

野鳥たより

—北海道—

第54号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和58年12月21日



ケアシノスリ 幌延町下沼 1983.1 富士元寿彦



もくじ

探鳥地案内 (利根別自然休養林)	2
岩見沢周辺の野鳥	山田良造..... 3
ホシガラスによるミネカエデの翼果の散布	齊藤新一郎..... 8
探鳥会報告	鷓川、鷓川..... 10
探鳥会案内	11
鳥民だより	11

利根別自然休養林

- ◆位置 岩見沢市緑ヶ丘
- ◆交通 国鉄岩見沢駅から、中央バス「市内Aコース」に乗車
“教大前”下車、徒歩15分
- ◆概況 岩見沢市の南東に位置する丘陵地帯の一角に、360haほどの鳥獣保護区に指定された自然休養林があります。人造池が3ヶ所あり、広葉樹林が主体ですが、植林されたトド松林もある、変化に富んだ環境のなか、起伏にとんだ遊歩道が続く。冬期間は歩くスキーコースとして整備される。
- ◆探鳥コース どのコースも捨て難いが、ポート小屋から、池ぞいのコースをとり、大沢線を経て中央園地へ、そこから引き返し、松林をぬける中央線をもどるコースをお勧めします。
約5km、3～4時間のコースです。
- ◆見られる鳥たち 春一大正池の水がとけると、待ちかねたようにオシドリがやって来て春の訪れとなります。ミソサザイ、キセキレイ、ルリビタキ、ビンズイ、コリリなどが北への旅の途中、顔を出し去って行き、「また今年も来たよ」とオオルリ、クロツグミが美声を、どっと団体で到着のキビタキ、ウグイス、センダイムシクイ、ヤブサメ、ニューナイスズメ、イカル、シメ、ツツドリ、こっそりいつのまにか、アカショウビン、ヤマシギ、トラツグミ、メジロ、ヨタカも来て、もともからいる鳥たちとにぎやかにさえずりあいながら夏へと移って行きます。
夏一いそがしく餌を運ぶ、シマエナガやキビタキ、うっかり近付きすぎると、まるでしかりつけるようにアカゲラがつきまとう、みんな子育てに懸命である、頭の中までしみこむエゾハルゼミの声、上空を横ぎるハイタカそして、真白い綿のかたまりのようなエゾフク

探鳥地案内

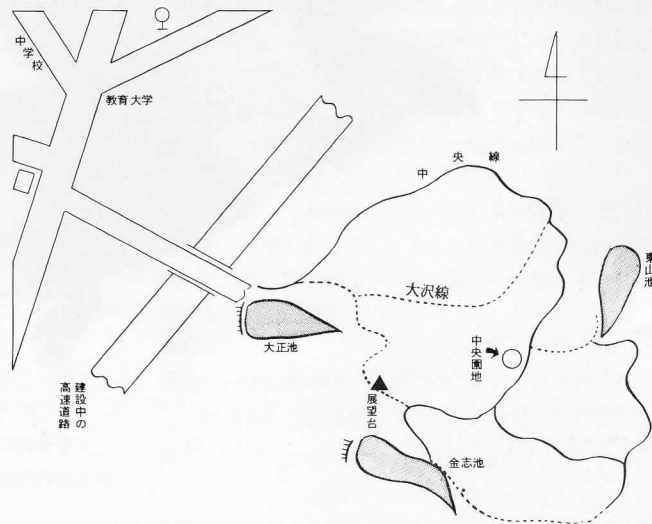
23

ロウのヒナ、親の後を連らなってオシドリのヒナたち、どのヒナも無事に育てと祈っているうち秋へ。

秋一木の葉が色づくころ、南への旅鳥が顔をみせます。エゾビタキの可愛い姿をはじめ、マミチヤジナ

イ、シロハラ、カシラダカが通過して行き、夏は姿の見えなかった、キクイタダキ、ミヤマカケスが顔をみせる。ムクドリ、カワラヒワの大群を見送ると、春夏と楽しませてくれた鳥たちはいつのまにか去って行ってしまいます。

冬一雪にすっぽりとおおわれた森では、シマエナガを先頭に、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、コゲラ、キバシリが次々にすぐ目の前を通りすぎて行きます。アカゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラもいそがしげに木をつつき、運が良い日はクマゲラも目の前まで寄って来る。ウソが良い声で姿を見せ、ツグミ、アトリ、キレンジャク、ヒレンジャク、マヒワの群飛、それにつこむハイタカ、上空にはノスリが舞い、珍客オジロワシも83年にはあらわれました。



〒068 岩見沢市6条東13丁目 長岡宏幸

岩見沢周辺の野鳥

山田 良造

私が岩見沢に住むようになってまだ1年6ヶ月である。そこで、ここでは未だ不十分な私の資料に、岩見沢野鳥の会の方々による情報を加えてまとめてみました。

1. 期間

昭和57年4月から昭和58年9月までの1年6ヶ月。ただし当期間以前でも船造淳一氏らの写真等で明らかになっている記録を加えた。

2. 観察地域

岩見沢市、北村、及び栗沢町の一部（岩見沢市に接続する美流渡地区）と美唄市の一部（北村に接続する宮島沼）。

3. 地域の環境

岩見沢市は石狩平野の東側に位置し、その東側は夕張山系の丘陵地帯である。この丘陵地には利根別自然休養林があり、岩見沢市街地に接しながら比較的自然が残されている。この森は広さ365ha程であるが、カツラ、ナラ、シラカバ等の樹齢の高い広葉樹林が保存され、空知

地方最大の野鳥生息地である。

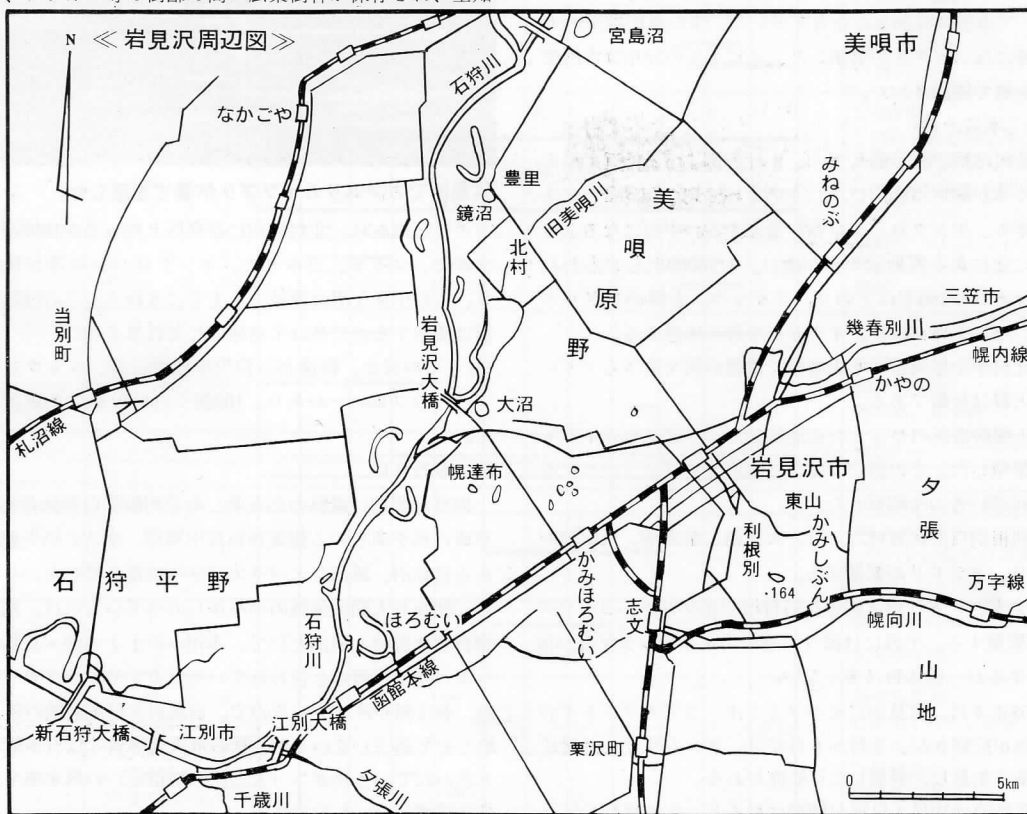
西側は石狩平野に広がる水田地帯で、幌向川、幾春別川、利根別川、旧美唄川が流れ、北村地区で石狩川の本流に合流している。北村地区には石狩川の切替でできた沼をはじめ、大小の沼が点在し多くの水鳥が生息している。

4. 鳥相の概要

岩見沢周辺で記録された野鳥は41科・146種である。このうち、繁殖又は繁殖した可能性ある野鳥は70種で、記録した野鳥の48%であった。

(1) 森林の鳥

環境が最も保存されている利根別自然保養林での記録が多く、ニュウナイズメ、キビタキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、シマエナガ、アカゲラ等が繁殖している。クマガラはこの森でよく見られ、営巣したと思われる巣穴や食痕は多い



(2) 猛禽類

4月融雪の頃オジロワシが北村砂浜の古川や宮島沼で観察され、また冬期間日出町市ゴミ捨場で幼鳥が越冬した。

3月子金子町地区水田で、雪から顔を出した藁にねずみを狙ってかノスリが飛来する、多いときは5～6羽のノスリが電柱に止っているのを観察した。市内ではチゴハヤブサが繁殖し、58年は緑中学校、岩見沢農業高校、青木神社の三箇所所で営巣した。

利根別の森ではエゾフクロウが繁殖した。またこの森の近くでコノハズクの幼鳥が保護され、繁殖の可能性がある。

(3) 草原の鳥

幌達布地区の石狩川堤防や河川敷地の草原に、オオジュリン、コヨシキリ、シマアオジ、ヒバリ、カワラヒワ、アカモズ等がヒナを育てていた、また水田地帯の土手等にはノビタキが繁殖した、ノビタキの分布は水田地帯全域で確認された。

(4) 水辺の鳥

北村地区の沼が最もよく、4月初旬、この付近で最も早く氷が解ける猫沼にコハクチョウ、ヒドリガモ、オナガガモ、キンクロハジロ等が飛来する。中旬になるとさらに北にある宮島沼の氷が融け、4～6000羽とおもわれるマガンや100羽以上のコハクチョウ、大群のヒドリガモ、キンクロハジロ、オナガガモ等が休息する。

北村中小屋周辺の水田地帯で落穂の餌をあさるマガンの大群は壮観である。

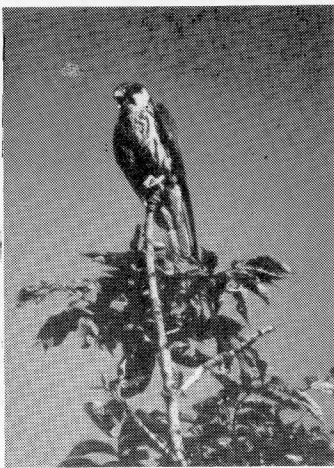
上幌向地区のひょうたん池等はカイツブリやカルガモが繁殖した。この沼だけで、2番のカイツブリがヒナを連れているのを観察した。

利根別自然休養林内には、大正池、金志池、東山池があり、オシドリが繁殖する。

シギ、チドリ類は幌達布石狩川でイソシギ、コチドリが繁殖する。干潟には渡りの途中のアオアシシギ等が休息するが、個体数は多くない。

58年4月、宮島沼にセイタカシギ、コアオアシシギの珍鳥が記録され、5月～8月には、カムリカイツブリが番で生息し、繁殖した可能性がある。

宮島沼は10月1日猟が解禁になると、カモ類たちはハ



チゴハヤブサは岩見沢市内で3箇所営巣した。



4月、宮島沼周辺は北帰行のマガンが大群で休息する。



8月、上幌向周辺の沼でカイツブリが営巣した。



宮島沼でカムリカイツブリが番で生息した。

ンターに追われ、北村鏡沼に禁猟区と知ってか1000羽のマガモ、コガモ、カルガモ、キンクロハジロ等が集まり、この小さな沼は凍結するまでにぎわう。この付近の沼は凍結するので冬は生息地としてはよくない。

(5) このほか、幌達布石狩川岸崖地には、ショウドウツバメのコロニーがあり、100個ぐらの巣穴を確認した。

5. おわりに

岩見沢周辺は森林の鳥を楽しめる利根別自然休養林、草原の鳥を楽しめる幌達布石狩川周辺、水辺の鳥を楽しめる宮島沼、鏡沼などバラエティーに富んでいる。しかし、私たち人間が保護の手を差しのべているのは、利根別自然休養林と鏡沼だけで、本州～ウトナイ湖～宮島沼～シベリヤと渡ると言われているマガンやコハクチョウが、春は猟が終っているのに、宮島沼を日本最後の休息地として過ごしているが、秋の飛来個体数では日本最大と言われているマガン（天然記念物指定）の飛来地を、是非保護したいものです。

岩見沢周辺の鳥類リスト

◎繁殖
○繁殖した可能性
-見られる時期

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	繁殖	備考
カイツブリ	カイツブリ アカエリカイツブリ カムリカイツブリ					—	—	—	—	—	—			◎ ○ ○	上幌向ひょうたん沼など 雉ヶ森沼、金志の池 58年宮島沼
サギ	アマサギ アオサギ チュウサギ					—	—	—	—	—					58年月形大橋付近 北村、石狩川 57.5.18宮島沼
ガンカモ	シジュウカラガン ハイイロガン マガン ヒシクイ ハクガン オオハクチョウ コハクチョウ オシドリ マガモ カルガモ コガモ ヨシガモ ヒドリガモ オナガガモ ハシビロガモ キンクロハジロ ホオジロガモ スズカモ カワアイサ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ○	58年宮島沼マガンの群 同上 北村、中小屋、宮島沼 58年猫沼、宮島沼 57、58年宮島沼、中小屋 北村、宮島沼 同上 大正池、金志池、東山池 雉ヶ森沼など 上幌向ひょうたん沼など 鏡沼など 同上 鏡沼、宮島沼など 猫沼、鏡沼など 鏡沼、宮島沼など 宮島沼、鏡沼 宮島沼、石狩川 鏡沼 石狩川
ワシタカ	ミサゴ トビ オジロワシ オオワシ ハイタカ ツノスリ チュウヒ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎ ○	宮島沼 日出町ゴミ捨場に多い 宮島沼、日出町、砂浜 57.12.7 58.3 利根別 利根別 利根別 金子町 鏡沼
ハヤブサ	シロハヤブサ ハヤブサ コチョウゲンボウ チョウゲンボウ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		57年金子町、鏡沼 57年宮島沼、鏡沼 58年金子町 幌達布、金子町
ライチョウ	エゾライチョウ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	万字など
キジ	コウライキジ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	鳩ヶ丘など
ツル	タンチョウ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		56.5.10~5.25 幌達布
クイナ	ヒクイナ バン オオバン				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	56.8.6金子町 上幌向ひょうたん沼、宮島沼 宮島沼
チドリ	コチドリ メダイチドリ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	幌達布石狩川 57年金子町
シギ	ハマシギ ミユビシギ ツルシギ コアアシシギ アオアシシギ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		58年宮島沼 47年金子町へい死体 幌達布石狩川 58年宮島沼 幌達布石狩川

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	繁殖	備考
シギ	タカブシギ キアシシギ イソシギ トウネン ヤマシギ タシギ オオジシギ					—				—					◎ 宮島沼、下志文 幌達布石狩川 幌達布、大正池など 57年金子町 58.4.10利根別 57年宮島沼 ◎ 東山、幌達布など
セイタカシギ ヒレアシギ	セイタカシギ アカエリヒレアシギ				—		—								58年宮島沼 57.5.27 7条西5 58. 5.29大正池
カモメ	ユリカモメ オオセグロカモメ カモメ アジサシ				—	—									鏡沼、宮島沼 58.4.10砂浜 鏡沼、大沼、宮島沼 宮島沼
ハト	キジバト アオバト				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	全 域 利根別
ホトトギス	カウコウ ツツドリ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	全 域 利根別、美流渡
フクロウ	トラフズク コミミズク コノハズク フクロウ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	56.10.6金子町57.7.5 57.12.25金子町 市内 ◎ 58.9.9緑丘幼鳥保護 ◎ 利根別など
ヨタカ	ヨタカ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		利根別など
アマツバメ	ハリオアオツバメ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		大正池、幌達布
カワセミ	アカショウビン カワセミ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	利根別 幌達布石狩川
キツツキ	アリスイ ヤマゲラ クマガラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	◎ 利根別、宮島沼など ◎ 利根別、美流渡など ◎ 利根別、夕張峠など ◎ 全 域 ◎ 利根別など ◎ 同 上
ヒバリ	ヒバリ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	全 域
ツバメ	ショウドウツバメ イワツバメ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	幌達布にコロニー 北村
セキレイ	キセキレイ ハクセキレイ ピンズイ セグロセキレイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	◎ 美流渡など ◎ 全 域 ◎ 利根別 57年緑ヶ丘
ヒヨドリ	ヒヨドリ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	利根別など
モズ	モズ アカモズ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	◎	◎ 全 域 ◎ 幌達布など
レンジャク	キレンジャク ヒレンジャク				—	—	—	—	—	—	—	—	—		利根別、市街地など 58年市街地
カワガラス	カワガラス				—	—	—	—	—	—	—	—	—		万字幌向川
ミソサザイ	ミソサザイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		利根別

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	繁殖	備考	
ヒタキ	ノゴマ													◎	幌達布	
	ルリビタキ				—									◎	58年利根別	
	ノビタキ													◎	北村、上幌向など	
	トラツグミ													◎	利根別	
	クロツグミ													◎	利根別など	
	アカハラ													◎	東山など	
	シロハラ				—									◎	利根別	
	マミチャジナイ														◎	57.10.2利根別
	ツグミ														◎	全 域
	キビタキ														◎	利根別に多い
オオルリ														◎	利根別など	
エゾビタキ														◎	58.9.18利根別	
コサメビタキ														○	利根別など	
サメビタキ														◎	利根別	
ウグイス	ヤブサメ													○	同 上	
	ウグイス													◎	利根別など	
	エゾセンニュウ													○	幌達布、宮島沼	
	コヨシキリ													◎	同 上	
	オオヨシキリ													◎	全 域	
センダイムシクイ													○	利根別		
クイタダキ													○	同 上		
エナガ	シマエナガ													◎	利根別など	
シジュウカラ	ハシブトガラ														◎	全 域
	ヒガラ														○	利根別など
	ヤマガラ														○	利根別
	シジュウカラ														◎	全 域
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													◎	同 上	
キバシリ	キバシリ													○	利根別など	
メジロ	メジロ															同 上
ホオジロ	ホオジロ														◎	美流渡など
	カシラダカ														◎	北村など
	シマアオジ														◎	鏡沼など
	アオジ														◎	幌達布
	クロジ														◎	全 域
オオジュリン														◎	58.4.29利根別 幌達布、宮島沼	
アトリ	アトリ														◎	利根別
	カワラヒワ														◎	全 域
	マヒワ														◎	58年上幌向
	イスカ														○	58年1条東2
	ベニマシコ														○	幌達布など
ウソソ														○	利根別	
イカル														○	同 上	
シメ														○	同 上	
ハオトリ	ニューナイズメ														◎	同 上
	スズメ														◎	全 域
ムクドリ	ムクドリ														◎	同 上
	コムクドリ														○	美流渡など
カラス	ミヤマカケス														◎	利根別など
	ハシボソガラス														◎	全 域
	ハシブトガラス														◎	同 上

〒068 岩見沢市7条東4丁目KB204

ホシガラスによるミネカエデの翼果の散布

斎藤新一郎

まえがき

樹木の果実は、その内部の種子を保護するとともに、種子の散布にも大きな役割を演じている。それらの形態により、風散布や動物散布が知られているのであるが、形態だけで散布者を決めてかかってはいけないこともある(例、トドマツ：斎藤、1983b)。

カエデ類の翼果は、一見すれば、風散布であるとみられる。しかし、野外観察によれば、母樹群からはるかに隔たった場所での実生、実生の東生、山取り苗からの盆栽の東生、生活型(林内低木)など、風散布だけでは説明できない実例が数多くみられる。

ただし、カエデ類の鳥散布については、黒田(1982)も触れていない。

カエデ類の翼果

カエデ属種の果実は、1対の翼果(Double samaras)であり、果内に1個の、無胚乳の種子を含む。果実は集まって、果序をつくる。翼部の長さは、ふつう、果実本体の2倍以上ある。この翼果は、対のまま、あるいは分れて、おもに風に、一部は流水に散布される、とみられている。

高木のイタヤカエデ、ベニイタヤなどが、また、小高木のオガラバナの果序が垂下するのに対して、低木のミネカエデの果序はあまり垂下しない(図-1)。

果実本体の果皮は革質で、堅く、いわゆる「堅い実」

であり、乾燥に耐え、腐朽にも耐性が高い。苗畑においては、硬実に属し、発芽に2年かかるほどである。

風散布と翼果からみると、カエデ類の翼果は、カンパ類、ハルニレなどよりかなり大きく、マツ科の有翼種子よりも一般に大きく、ヤチダモに劣らないほどのサイズである。

生活型

カエデ類の生活型には、高木から小高木、そして低木まで、いろいろな樹種がある。

高木	イタヤカエデ	高さ25m
	ハウチワカエデ	15m
小高木	オガラバナ	10m
低木	ミネカエデ	3m

ミネカエデは、亜高山帯の上部にまで成育し、そこでは単独に群落をつくるのではなく、ダケカンバ林の下木として存在することが多い。また、通直の単幹型でなく、多幹の株立ち・ほふく型であるのがふつうである(図-2)。

下木であること、林内は風が弱いこと、果実がかなり重いことなどから、ミネカエデの風散布距離は長くない、おそらく100mにも達しにくいのではなかろうか。

また、下木の多くが鮮明な色の多肉果をつけて、鳥にディスプレイ効果を示すのに対し、ミネカエデの果実は風散布型の翼果であり、やや上向きにつくとはいえ、成

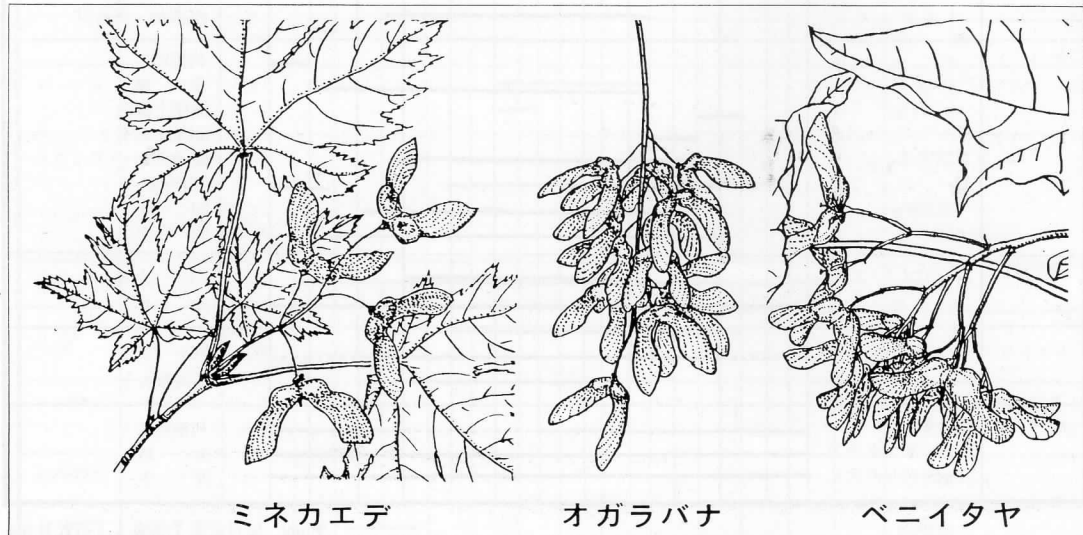


図-1 カエデ類の翼果

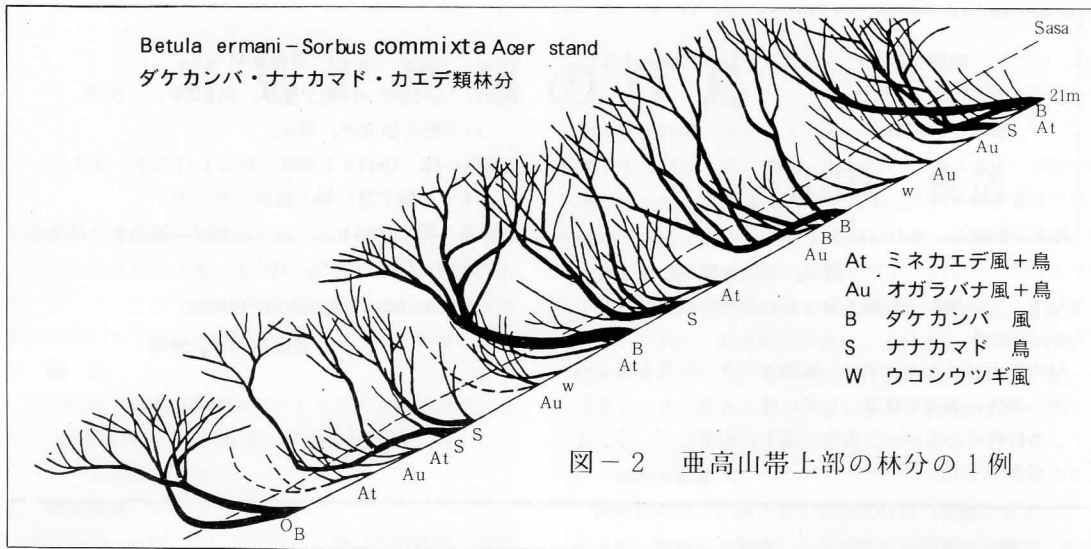


図-2 亜高山帯上部の林分の1例

熟しても鮮明色でないから、果実食鳥へのディスプレイ効果は乏しいとみられる。

従って、ミネカエデの翼果は、風散布にあまり有利ではない、そして、果実食鳥による消化管通過型の散布にも適応していないといえよう。

実生の束生

ミネカエデの実生が、知床のハイマツ実生の成育地に観察された。(斎藤、1983a)そこは、ホシガラスによるハイマツ種子の隠し場(Cache、カッシ)であり、ハイマツも、ミネカエデも、実生の大半は束生(1穴から2本以上の実生が成育する)であった(写真-1)。

束生する実生の数は、1穴から15~40本もあり、これだけの数が裸の斜面上部の1穴に集まるのは、風散布ではありえない。やはり、無翼種子のハイマツと同じく、ホシガラスによる地中貯蔵と、その食べ忘れに由来するものと考えられる。

カエデ類の実生の束生は、盆栽にしばしばみられる。盆栽愛好家は、ふつう、林道の切り取り法面から束生した

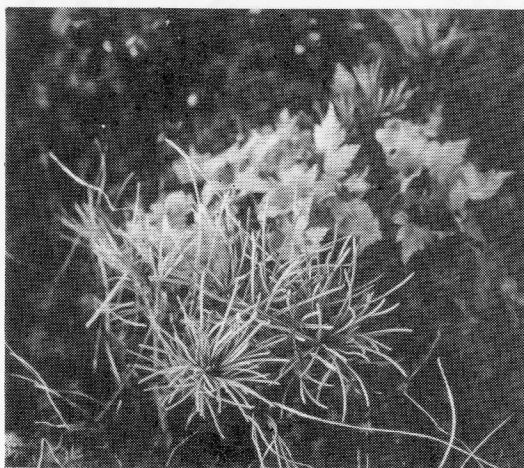


写真-1 ミネカエデとハイマツの実生の束生

実生を採掘し、そのまま鉢に移植する一単生の実生を寄せ植え・束植えたものではない。これには、ミネカエデ、ハウチワカエデ、イタヤカエデなどがみられる(写真-2)。従って、カエデ類の実生の束生は、由来はともかく、早くから盆栽家に知られていたことになる。

なお、イタヤカエデの実生が、垂直分布の上限よりかなり高い標高にときどき観察されることは、鳥散布の可能性がきわめて大きいといえる。また、海岸砂丘上のカエデの成育は、山地の母樹群からの距離を考えると、ミズナラ(堅果)ともども、少なくとも数世代前には、鳥散布に由来する、と推測できる。

ただし、ミネカエデの場合にはホシガラスであっても、イタヤカエデやミズナラの場合にはミヤマカケスであるかもしれない。いずれの場合も、散布者は隠匿貯蔵型であり、果実は大粒の「堅い実」である。

むすび

カエデ類の翼果は、形態的に風散布に適応しているとみられ、実際に風に飛びやすい。また、流水にも運ばれる。しかし、これらの場合には、着地しても覆土されることは稀であり、地表に裸出しているのは食害を受けやす

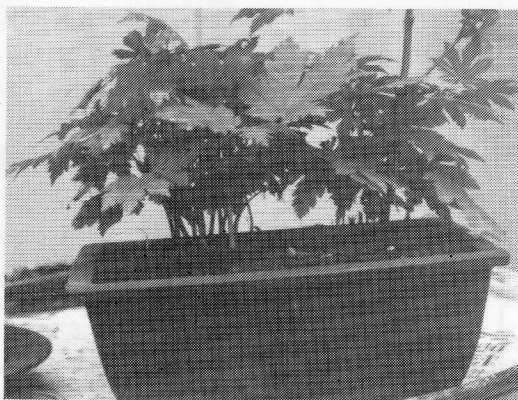


写真-2 ハウチワカエデの束生した盆栽

い。そして、風散布距離についてもそれほど大きくないとみられる。

一方、数多くの観察からみると、カエデ類の実生の成育場所、東生などについては、動物、とくに鳥による散布が重要とみられる。ホシガラスによるミネカエデの堅い果実の貯蔵と、それに由来する実生の東生とは、ホシガラスにとってはハイマツ種子の不足を補うためであるとしても、鳥散布（貯蔵・食べ忘れ散布）の重要性を示すものである。

林内低木のミネカエデは、風散布プラス鳥散布によって次の世代の成育を確実にしている、とみられる。そして、多幹株そのものが、実生の東生に由来している、とさえ推測できる。

参考文献

- 黒田長久、1982：鳥類生態学、641 P P、出版科学総合研究所、東京。
齋藤新一郎、1983 a：知床半島におけるホシガラスのハイマツ種子隠し場の観察。鳥、32：
齋藤新一郎、1983 b：トドマツ種子の風散布と鳥散布、北海道野鳥だより、51：7～8。
〒079-01 美瑛市光珠内町東山
北海道林業試験場



鷓 川

58.8.28 松本一郎

心配していた空模様も現地に着く頃には明るさも増してぼっとする。他団体に合流させていたたく探鳥と、海辺で見る鳥。共に始めての事ゆえいつもの内々の探鳥会のような気軽さは無く、多少気の引きしめる思いがする。会長、幹事さんに、ご挨拶も済ませていただきフィールドに入る。自分はふだんめったに見ない海、砂丘の間から少し見える波頭広々とした牧草地、所々を群れている牛馬、全く鳥を忘れさせる風景が目いっぱい広がっている。水平線にかすんで見える苦小牧の工場のエントツが、此の場にそぐわない、此の場に来て、世間の雑事にちらっとひきもどされる思いがする。片側牧草地内に時折り姿を見せる鳥達には余り気のりしない。しばらく歩いて行き止りの海辺まで来て皆さんがそれぞれ機材を使って、くいつくようにして鳥を探している。自分もひかれる思いで双眼鏡をのぞく目に気が集中してきた。森林で見ると違ってじゃまになる枝葉が無くて見やすい。空と水と砂の中から探し出すだけ、すっきりとしてなじみやすい場所だと思ふ。こんな良い処で鳥を見せていただくなんて、見方によってはぜいたくなことだと思ふ。浜を飛ぶ鳥は山の鳥とくらべてスナナリと見えてスピードもあるようだ。見せていただいた鳥メダイチドリは器量が良い。トウネンは、シギ類で一番小さいと教えられる。オオソリハシシギは、何と彼の口バシは餌をとっている時はその物からあまりうごかないので、山の鳥の様にちょこまかしないので、じっくり

と良く見られる。スコープには実に明るすぎる位全身見せてくれる。どなたか「あれは何だ」と言う、その方を見ると砂丘の上にカモメのような鳥が一羽た、ずんでじつとうごかないで見える。側の人があれは事故だ、いずれは何かのエサになるのではと言う。仲間のカモメのむれがそのそばを小さくとびまわるが全くうごかない。可愛そうなくらい気になる。時間がきて帰路にふりかえって見るとうづくまってしまっていた。鷓川の彼の一羽のカモメはどうなったかと今でも時おり思い出す。

【記録された鳥】 アオサギ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、トウネン、ハマシギ、タカブシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ミサゴ、以上 28種

【参加者】 井上元則、中村良助・トク、長瀬宏幸・範子・滋雄、松本一郎、小林隆志、堀内 進、道川 弘・富美子、谷口一芳・登志、清水 幸・朋子・克幸、戸津高保・以知子、工藤敏人、泉屋宜志・恵津子、大坊幸七、屋代育夫・美恵子、早瀬広司、難波愛子、遠藤幸一、太田タミ子、武沢和義、新田順子、沢里英雄、小堀煌治、天童雅俊、曾根モト、萩 千賀、若林信男、羽田恭子、青木二郎、矢口兼江、神田健男、真田伊津子、長谷川涼子、絵内厚子、以上43名

【担当幹事】 早瀬広司、天童雅俊、萩 千賀
〒047 岩見沢市2条西4丁目

鵜川

58.9.18 青木二郎

9月の探鳥会のテーマは前月と同じシギ・チドリで、場所も同じ鵜川である。

シギ・チドリのような旅鳥には、とかく当りはずれがあるもので、うまくすれば大群にぶつかることもある反面、時によってはサッパリということもある。今年は8月の探鳥会が過去最低の淋しさであった。それに9月15日のシギ・チドリ全国一斉調査での石狩河口の状況も芳しいものではなかったと聞いている。そうすると今度の探鳥会での出現度もあまり期待できないのではないかとイヤな予感があつた。

然し、当日朝になると、そんな予感も忘れてイソイソと家を出てきたような次第である。

さて、鵜川牧場に入るとコースを斜め左にとつて、鵜川本流の岸辺に向う。心地よい草地を歩くこと1km。着いた途端、中州にダイゼンが3・4羽いるではないか。

幸先よしと喜んだのはよかったが、そのあとがよろしくない。お目当てのシギもチドリも全く姿を見せないのである。

川岸を離れて、いつもの入江の方に移動する。入江を渡渉して海側に出る。やっぱり駄目である。澄みきった空、緑の牧場、紺青の海。暑からず寒からず、快適この上ないのかかえって恨めしい。

もう昼食にしようやと座り込んだのが何とまだ11時であつた。いささかヤケクそ気味である。

他に見るものがないので、波打ちぎわのウミネコにレンズを向ける。オオセグロカモメも混じっている。大きさ、足の色、嘴の斑紋などで比較識別してみる。

このあと、少々時間を持って余し気味で1時すぎには鳥合せを行なった。その他一般の鳥は大体平年並みに出ているのに、本命のシギ・チドリだけは次のシーズンに期待をつなぐほかないようだ。

〔記録された鳥〕 アオサギ、トビ、チュウヒ、ダイゼン、オオセグロカモメ、ウミネコ、アジサシ、キジバト、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス、ワシカモメ、シギSP2種 以上20種

〔参加者〕 小岩 武、堀内 進、清田吉晴・信子、天童雅俊、羽田恭子、萩 千賀、野々村 菊、青木二郎、犬飼 弘、柳沢信雄・千代子、岩泉ゆう子、渡辺紀久雄、道川 弘・富美子、浪田良三、屋代育夫、長谷川涼子、紅林雅文・幸子、以上21名

〒069-01 江別市大麻園町11-33



〔野幌森林公園〕 昭和59年2月19日、4月22日、29日、午前9時30分大沢駐車場入口または百年記念塔午前8時30分集合です。2月は歩行に適したスキーが必要です。防寒には十分にご注意下さい。

〔ウトナイ湖〕 昭和59年3月25日(日) 午前10時30分ウトナイ遊園地集合。ガン、カモ、ハクチョウなどの水鳥の他にオオワシ、オジロワシを観察します。

<野幌森林公園を歩きましょう>

昭和59年4月15日探鳥散歩を行います。どうぞご参加下さい。午前9時30分大沢駐車場入口、または百年記念塔午前8時30分集合です。

いずれの探鳥会も、ひどい暴風雪、暴風雨でないかぎり行きます。昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。

探鳥会についてのお問い合わせは早瀬(011)611-0949まで。



◆定例幹事会報告

58年9月7日(水)、19時~21時、婦人文化センター 幹事13名

〔審議内容〕

1. 前田一步園財団賞受賞の報告(代表幹事)

2. 野鳥だより52号発送の報告
3. 総務幹事の補充について(以上、総務担当)
(編集の大坊幹事が総務になりました。)
4. 探鳥会の回数と開催場所の再検討について
5. 1月の探鳥会の会費について(以上、探鳥担当)
6. 野鳥だより53号の編集進捗状況について(編集担当)

7. 探鳥会参加者の損害保険加入について

58年10月5日(水)、18時30分～20時30分、札幌市民会館会議室、出席幹事11名

〔審議内容〕

- 1 (財)前田一步園から受けた表彰状は井上会長宅へ届けた。
- 2 探鳥会参加者に対し損害保険をかけることとし、費用は、会が負担、早い機会に契約することとした。
- 3 新年懇談会は、59年1月の第3土曜日とした。
(以上、総務担当)
- 4 チェックリストによる野鳥分布図の作成は、中止することとした。(編集担当)

58年11月20日(水) 18時50分～21時 札幌市民会館会議室、出席幹事9名。

〔審議内容〕

- 1 障害保険に加入し、10月23日から1年間の契約を行った。
- 2 会員名簿を発行することについて、提言があった。
- 3 「野幌森林公園探鳥散歩」の時にも参加者名、記録された鳥の種名の記録をとることとした。
- 4 貸切バスを利用した定例外の特別な探鳥会の開催について、提言があった。
- 5 (財)前田一步園からいただいた副賞10万円の用途について討論した。(会員の方で用途について御意見があればどうぞお寄せ下さい。例、双眼鏡の貸出し、ワッペン作成、フィールドノートの作成等)

◆新年懇談会の開催について

下記のとおり新年懇談会を開催いたしますので、ふるってご参加下さい。

とき 昭和59年1月21日(土) 午後1時半～4時
ところ 札幌市中央区北1条西7丁目
北海道婦人文化会館

◆前田一步園財団とは

過日、私共の北海道野鳥愛護会を表彰して下さった前田一步園について簡単に紹介します。

故前田正名氏が、明治40年に旧内務省所管国有林未開地の貸付を受け開拓に従事し、その後、明治42年から同44年に亘って国有未開地処分法に基づいて牧場、農地、山林として払い下げを受けた阿寒町の北端、阿寒国立公園内の阿寒湖を南、西、北の三方から包囲する面積3.641ヘクタールを基盤として設立された財団です。

一步園の名は故前田正名氏座右の銘「万事に一步を大切に」から氏自身が付けたものだと思います。

正名氏没後、長男前田正一氏、三男の子前田雄吾氏、二男前田正次氏の順に相続されたが、昭和33年前田正次

氏の死亡により、前田光子氏、エア子氏、峰子氏の共有となっていた。

この中で故前田光子氏は、ご主人正次氏没後一人で阿寒町に移り住み所有地の管理にあたっていたが、特に阿寒湖畔の森林の原始性維持に努め、同湖畔市街の俗化防止や美化清掃など、国立公園としての景観保持に努力された。

又、奨学金として毎年100万円を町に寄付されたり、所有地を無償で提供しウタリ住民の集団化を図り、その生活文化に貢献したほか、各種社会福祉法人への寄付、お年寄りの温泉招待など幅広い活躍をされました。

さらに、地域住民による記念植樹を主催したり、森林ハトロール車を町に寄付して山火事予防に役立てるなど、同地域の緑化推進や森林の愛護に大きく貢献され「湖畔の母」と慕われていた。

この前田光子氏が中心となり、大自然の偉大な天恵を多くの人々に永遠に味わってもらおうと資産のすべてを寄付して設立されたのが、財団法人前田一步園財団だそうです。

◆チェックリストによる調査の中止について

本会の事業としての野鳥分布調査は、52年6月に往復はがきによる調査から始まり、同年末には、その調査結果をまとめました(だより30号参照)。その後、往復はがきによる方法ではなく、チェックリストを用いて調査しようとのことで、「だより31号」にその説明をのせ会員に配布したところです。

しかし、チェックリストは思いのほか集まらず、このため「だより」で何回か調査の協力方について依頼するなどいろいろ努力をして参りました。

チェックリストによる調査の開始から今年で5年を経過した現在も、その送付数は極めて少なく全道的な分布図の作成は、ほとんど不可能な状況でした。このため、10月5日に開催されました幹事会で今後どのように取扱うかについて協議した結果、チェックリストを用いた調査は誠に残念ではありますが、一応終止符を打つという結論に達しました。

これまで、ご協力をいただいた会員の皆様には、心からおわびを申し上げるとともに、野鳥調査について御意見があれば、是非お寄せいただきたいと思っております。(編集幹事代表・白沢)

◆訂正

第53号の探鳥地案内「下沼」の文中「シマフクロウ」は「シロフクロウ」の誤りでした。おわびして訂正いたします。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費1,500円(会計年度4月より)郵便振替 小樽 1-18287

☎ 060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251-5465